

(平成7年1月11日発行)

<h1>会報</h1>	<h2 style="text-align: center;">第2号</h2> <p style="text-align: center;">北海道高等学校世界史研究会 事務局 北海道札幌平岸高等学校 062 札幌市豊平区平岸5条18丁目 TEL 011-812-2010 FAX 011-812-2049</p>
-------------	--

## 世界史必修の始まりに当たって

北海道高等学校世界史研究会  
会長 丹 暢 夫  
(北海道旭川東高等学校長)

”深刻化する世界史離れ”として、8年前山本達郎東大名誉教授は、高校の世界史履修者の減少を憂慮し、世界史必修の重要性を次のような観点から訴えています。世界史離れの状況は、①「国際化」や「国際的日本人」の必要性に全く逆行している。歴史的にものを考える訓練が少なくなり、その結果として若い人の考え方は、②現在の時点で物事を割り切って、合理的に処理していこうとする傾向が強い。過去、現在、未来の「続き」の思考が弱く、③相手の立場にたったの世界認識ができなくなっている(昭和61年8月31日朝日新聞)

新科目になった地理歴史科の目標には、いうまでもなく『・・・国際社会に主体的に生きる民主的、平和的な国家・社会の一員として・・・』が掲げられており、特に、世界史を学ぶ私たちは、これを重く受けとめなければなりません。

1989年の晩秋、あのベルリンの壁が崩壊したときの驚きを思い出します。国際社会に主体的に生きるためには、目まぐるしく動く諸外国の情勢を的確に理解し判断する能力と我が国との歴史的な経緯をきちんと掌握していることが重要です。

「なぜ、こんなことを学習しなければならないのか」という素朴な問いに、時々出くわすことがあります。学校知が日常知から遠く遊離しているという批判に対して、ただ耐えるだけではないと思います。九里幾久雄先生(埼玉県)が主張するように、世界史の内容・構成の再検討を常に意識し、生徒の生活実感と結びあう世界史の再構築を目指すことが求められています。

世界史研究会の果たすべき役割は、ますます重くなりますので、今後とも先生方の熱意あふれる御参加を心からお願い申し上げます。

## 第25回研究大会記録

日時	平成6年8月9日(火)		
会場	札幌市教育文化会館		
主題	国際理解を進めるための世界史教育はいかにあるべきか		
講演	加藤 和秀 氏	(東海大学文学部教授)	
研究発表	今井 一吉 氏	(北海道美唄工業高等学校教諭)	
	黒田 守 氏	(北海道愛別高等学校教諭)	
司会	大谷 和正 氏	(北海道札幌北高等学校教諭)	
	橋本 卓 氏	(北海道札幌南陵高等学校教諭)	
記録	小川 政博 氏	(北海道中標津高等学校教諭)	
	大澤 圭 氏	(北海道喜茂別高等学校教諭)	

### 講演

#### 世界史におけるイラン

東海大学文学部教授 加藤 和秀 氏

私は、地域としては中央アジアという所を専門にしております、ペルシャ語の文献を使い、チムールの行動について事細かく追求して、政治史中心に研究してまいりました。当初、日本では、ペルシャ語を読んで、歴史を研究する人はほとんどおりませんでした。現在では、研究者の数がたいへん増えまして、チムール朝研究というのは今たいへんな勢いがあります。欧米の研究者のみならず、日本の若い人達も非常に優れた研究をなさる人がいまして、世界的レベルで誇れるようなものもたくさんあります。

最近、モンゴル帝国の見直しはいろいろな形で書かれておりますのでご存じのことと思いますが、チムール朝については、まだそこまで話がいております。しかし、モンゴル帝国なり、チムール朝の歴史的意義は大きく変わってきている。つまり、これまでの見解が根底から覆されたと言えるぐらいの新しい見解が出て来ていて、モンゴルとかチムール朝というのは、略奪や征服をもととするという野蛮なという意識があった分野であったが、ところが、実際に研究を深めてみるととんでもない。むしろモンゴルやチムール朝時代にイランでは最も高い文化が花咲く。これは、イランを専門に研究している人(イラン人はあまりモンゴルのそういうことを認めたがりませんけども)も認めざるをえないぐらいの業績をたくさん作った。彼ら自身が手を染める

わけではありませんが、彼ら自身が自分たちのインスピレーションで、イラン人を使って、作らせて、書かせている。イランというのは、たいへん文化の高い世界であり、中東では一番文化的なレベルの高いと言われているところです。その長い歴史の中でも文化的に高い水準を保持してきた国、民族であり、それを最も高度な領域に高めていったのがモンゴル人であり、チムール朝であったということが明らかになってきている。時代的にも、13から15世紀にかけてという時代に文献資料がたくさん残っているという条件があります。そのほかにそういう作品（芸術作品、文学作品）が、無数に残ってしまっていて、まだいくらでも手がつけられていない分野があります。研究者の間では、それが常識になっていますけども、残念なことにそれが世界史という教科書には全く反映していません。それは、まだ研究が新しいということもありますけども、それ以上にさまざまな問題があるのだらうと思います。

今日のお話で、チムール朝を取り上げなかったのは、あまりにも今は専門的すぎ、それをお話ししても、必ずしも全体像につながらないためです。時間もありませんし、むしろチムール朝やモンゴル帝国がそういった高い歴史的な段階、あるいは芸術的な段階をしていたその現場であるイランという地域について、また世界史においてイランというのはどのような位置を占めるのかを中心にしてお話ししてみたいと思っております。

私も入試問題をしばしば作成しておりますが、世界史の教科書を見る限りは、イランという国、イランの文化や歴史は、極めて断片的にしか述べられておりません。結局、我々が今まで特に教科書の記述の中で知らされていたことは、ほとんどが西欧の学者たちが研究し、書き記した歴史に従っています。明らかに西欧という社会、彼らを作り出した文化が、地球上の他の地域、特にアジア地域を支配下におくか或いは従属下においていき、現在の世界史を作り上げたわけです。その世界史というのは明らかに西欧的な観点から見た世界史でありまして、ある意味ではアジアの捕らえ方というのは非常に歪んだ形で展開されています。日本の場合、中国や東南アジア、せいぜいインドまでですとなじみが深く、そのへんは自分たちの手で修正できるのですが、西アジアに関してはほとんど修正できないという状況にあります。

イラン史だけに限って言いますと、私がイラン史の分野に入ってすぐの頃、イラン史というのは一貫して3500年の歴史を誇っている、ひとつの歴史を営んで来た地域であり、民族であるはずなのに、そこで「古代史」が「西欧史」であって「イスラム期」以後が「東洋史」という分野分けがあったのには、驚かされました。それが日本の現実であって、まさにイランの歴史は西欧的な歴史観によって分断されている。或いは、言い過ぎかもしれませんが、略奪されているというか、勝手に西欧的な解釈が加えられて、必要のないものはどんどん切り捨てられている。そう言った状況にあります。

近代のイラン史研究は、どういう地域どういう領域を対象としているのかをお話しして行くため「イラン史の枠組み」ということから始めたいと思います。

まず、最初にあげなければいけない問題が、なぜペルシャとイランという二つの名前が使われているのかということです。これは、3500年の歴史を持つイランにおいて

全体像を見て行く中でようやく分かることだと思いますが、イランというのは正確には「イラーン」という名称でありまして、明らかに古代の「アーリアン」というのから転じてきた言葉です。イランというのは、アーリア人或いはアーリア人の国土とかそういう意味で使っている名称でありまして、イラン人自身はずっと「イラーン」を使っていました。彼らは現在、自分たちをどう言っているかということ、Irani という言い方です。ni というのは抽象的な語尾であります。これがイラン人という意味なのです。

ペルシャというのは、パールサという地名からきております。パールサというのはご存じのアケメネス朝ペルシャ帝国という国家が発祥しました南部イラン地域、ここにシーラズという古い町がございます。このシーラズを中心とした地域は、現在イランではファールス (Fars) と言っております。これはイスラム化以前にはパールスと呼ばれていました。実はアラビア語には「P」がありませんので、「P」が「F」に変わるわけでした、全く同じ地名なのです。パールスという言葉がしばしばギリシア神話にも出てきますが、この地域からアケメネス朝ペルシア帝国が勃興した。ギリシア人たちは、彼らのことをペルシア人と呼んだわけで、正式にはファールサ人、それが訛りましてペルシア人となったわけです。ですから、西欧人が一方的にイランのことを呼ぶときに使った名称です。

つぎにイランという概念についてお話をいたします。イラン人自身は、このイランという言葉はずっと使ってきて来ていますが、イランに対してふたつの対立概念を持っております。ひとつは、Aniran という言い方。an-airya 非アーリアというふうに使っています。もうひとつは、Iran に対して Turan といういい方があります。これは、紀元前2000年から1500年くらいに、アーリア人がカスピ海の北側の草原から南下し始めました。先に入って来て農耕民となったイラン人たちは、まだ遊牧民的な生活を維持している人々と自分たちを区別していたらしいですね。農耕化したイラン人は、遊牧的な性格をまだ残していた人達を Turan と呼んでいたようです。Turan から Iran へということは、文明化をすることを意味しているわけです。しかし、現在 Turan といいますと、おもにトルコ系の民族を指しています。トルコ人たちが中東に入ってくるのが、7世紀以降です。その時に、農耕世界と遊牧世界の文化接触が起こります。その際に、イラン人たちは旧来の概念であります Turan という概念をトルコ人にもあてています。

また領域としては、三重の領域を意識しているわけですが、まず、現在のイランイスラム共和国があります。つぎに、「固有のイラン」と訳しましたが Iran proper といういい方があります。これはイラン人がいったというよりは、欧米の研究者がいった言葉ですが、現在のイランイスラム共和国とほぼアフガニスタン共和国を加えた領域が Iran proper という領域であります。アフガニスタンというのは、近代になってからイギリスの政策で、インドを支配する観点からイランからそぎとったわけです。アフガニスタンは、民族的にも文化的にも最もイランと近い存在でありまして、本来はひとつの国と言っていいくらい近いものですが、いったん国境ができますと変わり

始めるものですから、今はだいぶ変わっています。それからさらに広域イラン Greater Iran と呼ぶものがあります。ここまで意識しなければイランはとらえられないというわけですが、Iran proper に、さらに周辺の地域を加えるということです。つまり、ザカフカス コーカサス地方、それに中央アジアの南部の地域、イラク、メソポタミアも加えます。時代によっても違いますが、そこまで意識しなければ、イランという国の歴史なり文化の領域は理解できない。

言語については、イラン語には、ペルシア語を筆頭としまして、クルド語、バルーチ語、パシュトゥー語（アフガン語）、タジーク語、パミール方言群、カスピ方言群などがあります。それから死語になっておりますけれども、古代語でありますパルティア語、ソグド語、ホータンサカ語などもあります。このようにたくさんのごとばがイラン語の中に入っております、その中で人口的にも、歴史的にも、最も重要なのがペルシア語です。歴史が長いですから、古代ペルシア語、中世ペルシア語、近世ペルシア語と三つの段階に大きく分けます。文字も違いまして、古代ペルシャ語ですと、アケメネス朝時代を中心としまして楔形文字、のちにアラム系文字も使い始めて、サーサーン朝時代にはパフラヴィー文字を使っています。これは、おもにその時代のゾロアスター教、マニ教、こういう宗教団体の碑文に残されています。イスラム以降になると、アラビア語の影響を受けて再形成されたものが近世ペルシャ語といわれています。文字はアラビア文字を使い、言葉はペルシャ語を書き写す。しかしイスラム化したわけですから、当然イスラム関係のアラビア語がたくさん入って来て、たいへん多くのアラビア語が近世ペルシャ語の中には入っている。これを近世ペルシャ語 Modern Persian と一般に呼んでいます。これが一時、例えば15、16世紀あるいはモンゴル時代、あるいはその前にもアッパース朝時代に、中国から、ヨーロッパではローマにかけての領域において、一種の国際語として通用していたのです。それは、イラン人の商人たちが、東は日本にも来たことがあります、商業活動を展開していたことがひとつの原因になっているわけです。モンゴル時代は、特にそれが典型的にでてきました。中国でペルシャ語の辞書が作られている。そしてモンゴル帝国史がイランで作られています。一番優れたモンゴル帝国史は、ペルシャ語で書かれているわけです。

イラン人は、長い歴史を持っていますが、人類史上初の世界帝国であるアケメネス朝を築いた人々でもあります。アケメネス朝については、最近の世界史ではかなり正確なとらえ方をされていますが、ギリシャまでは組み込めませんでしたけれども、アケメネス朝帝国の領域は、小アジア半島のから、エジプト、スーダン、そしてインダス川から中央アジアに至るまでの大帝国でありました。初めてこれだけの領域を、古代においてはたいへんな領域を達成した国家であります、この国家をつくったのがイラン人です。これは世界史の教科書にでてますのでそれ以上言う必要はないと思いますが、極めて能率のいい統治を行ったことは確かであります。ご存じのとおり、ギリシャ人たちは東方世界に展開していた高い文化というのを強く意識して、かつ自分たちはそれとはちがうという意識を強めて行く。そのギリシャ人たちにとって一番

脅威になったのは、このアケメネス朝ペルシャ帝国だったことは確かでありまして、ご存じのとおりペルシャ戦争がおこってるわけです。これについては教科書にも書いてありますが、このとらえ方はやはりまだまだ問題があるような気がします。ペルシャ戦役といういい方をしますが、これは考えてみるとおかしな話でありまして、攻めるのはようやくアレキサンダーになってですから、ギリシャ人自体は攻めた訳ではない。あきらかに、ペルシャ戦役という言い方はギリシャ人の側からみた言い方です。いずれにしてもこのペルシャ戦役についてのひとつの考え方というのは、ご存じのとおりヘロドトスの記述をよくひきあいにだすわけですが、アジアの専制政治にたいするヨーロッパの民主政の勝利といういい方を必ずしてきたわけです。しかしこうしたギリシャの民主政というのは、もう最近研究が進んでいますからご存じのとおり、決して現代民主政とは同じではない。全く違うわけです。この時代の民主政というのは、きわめて限られた形でのポリスの市民間におけるひとつの在り方である。それに対して専制の代表であるペルシャ帝国というのが対比させられるわけですが、これは問題が非常に多いわけです。決して民主政をギリシャがとっていたから負けたわけではないのでありまして、軍事的な勝敗にすぎないということが最近いわれるわけです。その後、専制君主をとっていたマケドニアが、ギリシャを統一し、そして初めてペルシャに対して反撃をできるようになったのですが、私は、これほどの皮肉はないと思っているわけです。

当時のギリシアの諸ポリスは、大国であるペルシャ帝国の干渉を受けてたいへんな苦しみを味わったのが実際ではなかったかと思うわけです。決して、東洋と西洋、ヨーロッパかアジアかという戦いということにはむすびつかないのです。単なる敵対する国家と国家の力、あるいは軍事力、それから戦争の機微などの問題、地形の問題などを含めた結果としてペルシャ軍が撤退したということです。そういった戦争、それが一般にペルシャ戦役といわれているものでして、ヨーロッパ人は古代の時代から、ヨーロッパがアジアに対して優位にたったということを誇るわけです。いうなれば、ヨーロッパが世界を征服するのは当然だといわんばかりのいい方をしますが、その点でいえばこのペルシャ戦役の見直しというのは、もうちょっと強調されてもよいと思います。

それからヘレニズムについて、ふれておきたいと思います。アレキサンダーと関連するわけですが、アレキサンダーというのは、当時のギリシャ人からいわせると専制君主そのものだという。決して、ギリシャのポリスの理想を体現した人物ではなく、その後の行動を見る限りは、彼はあきらかにアケメネス朝ペルシャ帝国の帝王となろうとしていたわけでありまして、アケメネス朝が作り上げていった支配領域の統治の仕方そのものを使ってますし、宮廷の儀礼、そういうものはすべて踏襲いたします。それぐらい徹底してペルシャ帝国を引き継ぐという意味を示しています。そのおかげでギリシャ人がイラン世界に進出して、一般にはヘレニズムが生まれてきたといわれる。しかし現在では半ば否定されておりまして、実はその克明にヘロドトスなりそれから本を読んで下さればわかると思いますが、当時我々が考えるようなイラン人とかギリ

シャ人とかいう意識は、我々が今考えるような意識と違いはないのです。特にギリシャ人、その当時はご存じの出稼ぎ民族であります。当時どれだけの出稼ぎ民族が東方の豊かな地域に住んでいたかということは、しばしばいろんな形で証明されているわけですが。ギリシャ人がいちばん多いです。ギリシャ人の出稼ぎ民があらゆるところに浸透しておりまして、一番有名なのが傭兵です。ペルシャ軍の傭兵部隊の中で一番強いのがギリシャ傭兵部隊で、これは非常に有名です。ですからこの戦いのときにも、ギリシャ人の傭兵部隊と戦っているはずですが、このほかにも技術者や芸術家として、ペルシャ帝国内でずいぶん多くのギリシャ人が活躍していたことが証明されてきたわけですが。ペルシャ帝国、イランのほうは、そもそも多民族国家ですから、他民族が入ってこようがっこうにかまわないわけです。アレキサンダーがここに進駐することによって、ギリシャ文化が浸透していき、新しいヘレニズム文化ができたといういい方をしますが、それ以前に既に一定の融合はできていた考えられます。アレキサンダーは、そこに乗っかっただけだといういい方もできるのです。ヘレニズムというもののとらえ方も、やはり大きく変えなければいけない時にきているようです。

## 研究発表 1.

黒田 守 (愛別高等学校) 「歴史新聞の制作等について」

### 1. 学校の概要

今回の研究発表では、前任校函館稷北高等学校での4年間の実践と本年度赴任した愛別高等学校の取組みを紹介する。稷北高は8間口で、入学生の大半は大学進学希望であり、専門学校や就職希望の生徒も考えながらの授業の難しさがあつた。一方、愛別高は入学生の2割以外は他市町から通学し、学力面で多様である。「なぜ高校に来たのか」「何を学ぶのか」という目的意識が欠如し、「どうせやっただってわからないもん」という学習への拒否感・劣等感が強く興味・関心・意欲低く、基礎学力を身につけられない生徒が多い。ただし、赴任してまだ4ヶ月であるので、今回は稷北高中心に発表する。カリキュラムは、稷北高では世界史2年生4単位(選択)・3年生2単位(継続履修)、愛別高では日本史2年生4単位(必修)世界史3年生3単位(必修)である。

### 2. 年間学習指導計画

稷北高では世界史は第2次世界大戦までで計画した。なぜ第2次大戦なのか。平和的・民主的なものを世界史で学んでほしい、敗北による民衆の痛み・復興の様子について知ってほしいという願いからである。授業は、エピソード・ビデオ・実物を用いている。(ビデオは年20本、導入・まとめで用いる、映画等)。プリント学習を併



用する。(例・『2001年宇宙の旅』冒頭部人類誕生のビデオを見せ、ヒトとサルとは何が違うのかというテーマでプリント作業させる。「こういう話をしたらこちらの展開にもっていけるかな」という反面失敗も多い。意見を聞かせてもらえれば幸いである。なお、日本史との時代的相関についても心がけている。(例えば、明の盛衰に関しては日本の室町時代、一休宗純や足利義満らのエピソードを紹介)日本史との接点をつくりたい、後に「日本の時代はこうだったんだ」という印象を残したい、との願いがある。私は、社会科の授業は、教師自らの人生観・世界観を語るべき場であると思う。授業は生徒たちに人生観・世界観を考えさせる場であるからだ。現実から見れば遠い道ではあるが、そこを目指していきたい。

### 3. 『歴史の中に生きた人物』・『私の見た歴史上の事件』・『教科書にない歴史』について

#### (1) 歴史の中に生きた人物(夏休みの課題としての取り組み)

これは、生徒に歴史上の人物を調べさせ、その人物の業績を単にまとめて書くのではなく、「自分はどう感じたか」という点に迫らせるものである。稷北高では1年間、夏休みの課題とした。教科書の登場人物で、休み前に人物名を報告させ、歴史上の位置・参考図書も記述させ、最低1,000字以上とした。ただし、中には教科書以外の人物(例えばサダム・フセイン、バスケットのマジック・ジョンソン、マイケル・ジョーダン、他にサッカー、ボクシング、英会話の講師、函館にゆかりの深いカール・レイモンなど)を取り上げた生徒もおり、それについては認めたがあくまでも自分の考えを書きなさいということを生徒には強調した。

3クラスで実施し、生徒の反応では、自ら考え取り組みの良い生徒が多く見られた。2学期以降、授業時に関係ある人物については生徒に発表させた。結果として授業内に生徒をひっぱることもできたように思われる。

#### (2) 私の見た歴史上の事件(歴史新聞の作成)

3ヶ年にわたり、それぞれ異なる形で取り組ませた。段階を追うと、(ア)グループ学習の取り組み(1グループ3~4名)(イ)冬休みの課題の取り組み(個人)は稷北高で、(ウ)授業中での取り組み(個人)は愛別高でおこなった。

(ア)では学校の図書館で3時間で完成させたものの、他人に頼ってしまう生徒が多かった。(イ)では文集として夏休み課題の『歴史の中に生きた人物(私の見た歴史上の人物)』そして冬休み課題の『私の見た歴史上の事件』をまとめるに際し、自分なりの感想を生徒にプリントして配布した。前者では、人物への深い考察・意見・感想があったこと、後者では、新聞形式で内容・レイアウト・挿絵・表・色などの面の工夫があったこと、大航海時代・フランス革命・南北戦争・第2次世界大戦などのテーマが多かったが、生徒各々の切り口で歴史的事件をうまくまとめたこと、さらに5年後、10年後にこの文集を開いてもらい、かつての自己の事件・人物に対する評価や感想・考えに変化があれば気づいてほしいという願いについてもふれておいた。

(ウ)については愛別高では難しいかと思った。教師側が資料(本・コピー等)を用意、その中から生徒に目次で選ばせる。授業内4時間を使い、最終的に生徒個々に



考えさせることをめざした。普段の態度からは考えられない良い取り組みを見せた生徒が多かった。今後自分たちで資料を探し、まとめさせるレベルまでもっていったら、と思う。愛別高では前述のカリキュラムであるので、2年生で日本史の新聞を、3年生で世界史の新聞を作成させながら（前年度の日本史新聞を見せながら同時代としておさえさせる）日本史・世界史のつながりを強調していきたい。はじめは「中学校みたい」「面倒くさい」「おもしろくない」と言っていた生徒たちもいざ文集が完成すると目を輝かせて自他問わず作品に見入っていたのが印象深い。また、生徒の質問に関しては「まず自分で調べてみたら」と調べさせた。実際調べてきて「先生こうだったよ」と教えに来てくれる生徒もいた。

### (3) 教科書にない歴史について

これは、昨年度の稜北高から今年度の愛別高でも続けている取り組みで、毎日の新聞記事（北海道新聞）の中で歴史に関するもの（日本史・世界史を問わず）を年間100枚程度配布し、ファイルさせる。手間は大変であるが、生徒の反応は良い。「今日はないの?」「最近少ないね」「今日はあると思ったよ」という声が聞かれ、それなりに歴史に興味を持ってくれたように思う。教師がコメントを加えたり、生徒に意見を求めたりが可能であるが、授業時間が短くなってしまいう点もある。生徒に歴史を考えさせる取り組みであり、コミュニケーションの場でもあるので継続していきたい。

以上(1)～(3)の実践を示してきたが、私自身単に生徒の興味関心をもたすのみでは、という反省もある。が、生徒に世界史を難しいものというとらえ方のみを持たせたくない。興味関心がつぶれ、ある人物・事件にひかれたり奥深さを味わう前にただつまらないものとなりかねない。日頃の授業内で生徒個々が考えていってほしい。また私自身高校時代の地理の授業1年間が発表学習の場であり「もっとさらに調べてみたい」という場面を経験しており、今の生徒たちにそういう場面をつくってあげたい、と思う。興味関心だけではなく、やはり生徒自身がある人物・事件等への歴史的評価を持ち深めていってほしいと思う。（以下、質疑応答）

Q：日本史と世界史の接点という話があったが、明・清代のアジア・日中間の具体的な話、また他の同様な実践例があれば聞かせてもらいたい。

（札幌高 吉嶺）

A：明代においては、日本の室町時代の人物である一休宗純に興味を持った生徒が多いので授業の導入として興味関心を引きつけ「このときの将軍は?」とか「日本ではこういうものがつくられていた、中国ではこうだったのだ」という話をした。正直いってなかなか世界史の中でうまく日本史に結びつけていくことができていない。今後の課題である。他としては戦国時代のヨーロッパ人來航・江戸時代の鎖国と当時のヨーロッパ諸国における宗教改革や大航海時代・中央集権国家の形成との関連にふれることなど。ヨーロッパのギルドと日本の座を比較させ、日本ではどうか、どの時代にこういうものがあったのか、両者の性格の違いについても話し合うことが多い。

Q：（年間指導計画一覧を見て）ビデオを多用しているが生徒の反応はどうか

またどういものが生徒に興味を持たせられるか。(北広西高 西)

A: 愛別高では20本ほど使用(予定)。例えば『古代ローマへの道』のような教養的なものについては生徒は正直「つまんない」といって見ないものもある。とぼして話しながら見る。映画の1シーンを導入に用いる。このやり方はうまくいく。例えば映画『薔薇の名前』より修道院について説明する際にもこのやり方であった。あとはビデオを見せた後にイメージを作らせておいて話をするか、印象的なところを見せてまとめさせるか、など。

(意見として): プリント中の生徒の意見・感想欄について、ワクによる限定をせずに別紙プリント・ノートを用意させ、書きたい生徒については更に書いていくのでそのようにすれば良い。(釧北陽高 窪田)

A: そのようにしたい。稜北高では板書で進めてきた。愛別高ではプリント学習で毎時間集めコメントを入れて返している。その際評価については、提出すれば○としているが正直苦しく、他の良い方法を考えている。

Q: 学習への興味が無い生徒に対し、私も世界史では第2次世界大戦までは何とかやっていきたいのだが、テストはどのように実施しているか。

(札幌北商 小野)

A: 愛別高ではテストの方はプリントから出す。また直前には予想問題をつくりやらせている。(今後考えていかなければならないとは思っている。)

## 研究発表 2.

今井 一吉 (美明工業) 「ドイツ統一とビスマルクの政治思想について」

### 1. はじめに

今回のテーマは大学の卒論のテーマであり、今回このような場で発表させていただくこととなった。最初に、発表の視点として、時代的には主に1850年代後半~1866年、具体的にはプロイセンとオーストリアとの戦争が終わって、北ドイツ連邦が成立するところまでを扱いたい。

(ドイツの)統一に関しては、2つの戦争があったが、対フランスの方の戦争を扱わない理由としては、現在の統一に関しての評価が、普墺戦争の方に重点を置く傾向にある。普仏戦争は、1866年に始まる戦争の「単なるエピローグだ」という面があり、私が大学時代学んだ時はこの評価がドイツの歴史学においては主説になっているという話を耳にしている。

今回は、ビスマルクの政治、特に外交に関する彼の考え方、洞察を挙げておきたい。ビスマルクの考え方が統一事業に、特にプロイセンとオーストリアとの戦争にどのように生かされているのか、さらに、このビスマルクの一連の政策についてその後どの

ような歴史的評価がなされてきているのか、を扱いたいと思う。最後に、教科書ではどう扱われているか、自分の問題意識等もあるので取り上げておきたい。

## 2. ビスマルク登場以前の諸状況

時代としては1850年代後半である。1848年の3月革命後、ドイツ統一は挫折したが未だその影響下にはあった。1つには国内市場の統一としてのドイツ関税同盟の拡大があげられる。ドイツ中小の領邦15ヶ国よりはじまったこの同盟は1854年には若干の小邦、オーストリアを除くドイツの大部分を占め、多くの領邦がプロイセンの方に大きな絆を結ぶ。さらに、鉄道網の建設および工場制工業の発展（例えばベルリン・ケルン・フランクフルトではイギリスの産業革命同様の産業の発展があった）もあった。2つにはドイツ統一をどうするか（統一をめぐる小ドイツ・大ドイツの2つの主義）や1848年以後の統一のナショナリズム（自由主義か旧体制の君主権か）についてのビスマルクの駆け引きがあげられる。この状況下、ビスマルクがどのような意識を持っていたかを以下で考察していく事とする。

## 3. ビスマルクの政治的洞察～「鉄血政策」の根底にあるもの

彼の外交政策の基本姿勢をパリ公使時代の「大報告書」（私信）に見ると、1. 大國の干渉を防ぐ。（当時ナポレオン3世が欧州の外交権を握っており、地理的關係上仏の同盟相手は露とビスマルクは推測）2. 仏・露には軍事的に対抗できないので協調的關係を保つ。3. 露には「反オーストリア感情」（露がハンガリー蜂起に対し援軍を送ったが、オーストリアは露の反対陣営に立った）があり、どうしてもオーストリアと同盟をもたねばならないという考えは持たない。プロイセンとオーストリアの共存にはあまりにもドイツの地は狭い、したがってオーストリアとの戦争は不可避である、以上の3つである。彼の外交の基本理念は「ドイツ」のためではなく、「プロイセン」のためにどうあるべきか、であった。次に、ビスマルクのナショナリズム（＝自由主義）に対する姿勢である。ドイツ統一を望む声が高まり、今日の連邦はその声に応える政治的基盤の役割を果たし得ない。したがって連邦に欠けているものを打ち建てる必要がある（連邦改革）、というものである。ビスマルクは、プロイセン主導の連邦改革によってオーストリアと他の諸邦との絆をうすめ仲違いさせ、両者を対抗せざるを得ない立場に追い込むこと、そしてナショナリズム運動を逆手にとりドイツ世論をプロイセンに引きつけ、オーストリアとの結託を防ぐことを考えた。ビスマルクにはプロイセンの王権が第一であるから、統一ナショナリズムそのものを、自由主義者ではなくプロイセンの王権に結びつけようとしたのである。1861年、首相就任後ビスマルクは国内的には鉄血政策、力（軍備）による解決をおこなうが、根底には以上のような考えがあったと思われる。

## 4. 憲法紛争～首相就任後、国内に抱えた問題

「鉄血政策」の実行を発端とするこの問題は、ビスマルクがプロイセン憲法の「予算は議会内で成立」という条文を無視し、予算不成立のまま軍備拡張・統治した、というものである。議会（下院）は、政府は憲法に違反していると非難する。

## 5. シュレスヴィヒ・ホルシュタイン問題～首相就任後、初めての外交問題

事実として、シュレスヴィヒ・ホルシュタインは本来デンマーク王との同君連合（1852年のロンドン議定書による）で、ドイツ系住民が多く世論もドイツよりの地であった。1863年にデンマークが併合を宣言すると、デンマーク王とこの地の領主であるアウグステンブルク公フリードリヒが対立、同年12月にはドイツ連邦軍がホルシュタインへ、翌年1月にはプロイセン・オーストリア軍がシュレスヴィヒへ侵攻、デンマークとドイツ連邦という図式で戦争が起こる。結果ドイツ連邦が勝利し、1865年のガシュタイン条約によってこの地はプロイセン・オーストリア両国の管理となった。ビスマルクには、ドイツ連邦もオーストリア同様プロイセンにとっては邪魔であるという意識があった。そこで、彼の政策は、両公国のプロイセン併合を最終的な目標として 1.プロイセン単独の武力行使による併合を避けるためにオーストリアとの協調（ヨーロッパの非難をあびやすいのでオーストリアをいのように扱おうとした）2.両公国の独立と連邦への加入には反対（プロイセンの利益を考えて）3.オーストリアとの関係に対立関係に変化させる（これについては自由主義者であったアウグステンブルク公を支持するかの選択をオーストリアにせまった。結果オーストリアは支持）、以上の3点をあげることができる。オーストリアの立場は、ウィーン体制を維持していくが、プロイセンに連邦の拡大か自由主義かという課題を押しつけられる形となった。ビスマルクの望みどおりプロイセンが一番有利になる結果に近い形となり、オーストリアは「プロイセンとの戦争は不可避」という意識を表面化することとなった。

## 6. 普墺戦争

開戦前夜、プロイセンとオーストリアの対立が緊迫化した。プロイセン管理のシュレスヴィヒでは独立運動を弾圧したが、オーストリア管理のホルシュタインでは独立運動に対し比較的ゆるやかな対応をしたことから察せられる。1866年1月にホルシュタインでの議会開設要求の集会在オーストリア当局の許可で開催されたが、プロイセンはこれに抗議、同年2月にプロイセンは御前会議でオーストリアとの戦争を決意している。その準備として同年4月イタリアとの間に軍事秘密同盟を結び、対オーストリア戦にイタリアが呼応しオーストリアに侵攻する（見返りとしてプロイセン勝利の際にはヴェネツィアの割譲を保証）ことを約束した。同年4月、ビスマルクは連邦改革案を連邦に提出。その内容は、従来の考え方にあった連邦各国の代表がつくる議会ではなく普通選挙による議会の開設であった。これには戦術的な面がうかがえる。この改革案は当然連邦で否決され、ただし世論としてはプロイセンが出した自由主義案をオーストリアがつぶしたことで、プロイセン側に好意を示すという意図があったと思われる。そしてガシュタイン条約を破棄、オーストリアと完全に国交を断絶し戦争状態に入るのである。1866年5月に仏のナポレオン3世が戦争を未然に防ごうと国際会議を提唱した。プロイセンにとってはナポレオン3世がイニシアティブをとり現状維持、の結果が見えており拒否したいが、仏との協調関係が崩れる恐れがある。その中で、オーストリアの方からどの国も領土・勢力を拡張しなければ会議に参加してもよい、という主張があった。結局調整がつかず会議は実現しなかったが、

ビスマルクにとってはこれは渡りに舟、助けを出してくれたのはこれから戦争するオーストリアだったからである。その後同年6月にはオーストリアが対立の問題を連邦に一任、プロイセンにとっては連邦には任せていられない。そこでプロイセンの方は軍をホルシュタインの方に侵攻させる。これに対し連邦はプロイセンに抗議するとして連邦軍をオーストリア中心にザクセン・バイエルンなどが加わりホルシュタインに向かわせる。プロイセンは連邦を脱退し、ザクセン・ハノーファー・ヘッセンに最後通牒をつきつけた。ドイツの地が戦争に入るわけであるが、勝敗が決まったのは同年7月、有名なケーニヒグレーツ（サドヴァ）の戦いであった。オーストリアはプロイセンが領土を分断されている現状から、兵力も分散すると考えていた。ところがプロイセンはおそらくヨーロッパでは初めて鉄道を使って兵隊を輸送した。ハノーファーを降伏させ、その後ザクセン国境に軍を進駐させてオーストリアに侵攻した。ケーニヒグレーツの戦いでは総兵力も差がない状態で、オーストリアの戦術がプロイセンに有利に働いたこともあり、最終的にオーストリアが総崩れの状態（戦死者・負傷者数ともにオーストリアの方が上回る）になった。ビスマルクはここで戦争をやめるつもりだったが、軍部はこの勢いでウィーンまで攻め、完璧にオーストリアを叩くことを目指す。しかしビスマルクは、フランス・ロシアとの関係を判断（フランス・ロシアが警戒心を持つのはビスマルクにとって好ましくない）、戦争停止を働きかけ、ナポレオン3世の仲介で同年8月のプラハ和約で戦争は終結した。ここでプロイセンはシュレスヴィヒ・ホルシュタイン・ハノーファー・ヘッセン・フランクフルトを併合し領土がつながった。この後プロイセンを中心に北ドイツ連邦が成立（これは従来のドイツ連邦の解体を意味した）連邦首長にヴィルヘルム1世、連邦宰相にビスマルクが就任した。また世論を考慮して二院制（連邦参議院・普通選挙による連邦議会）をしいた。

## 7. ビスマルクをめぐる評価

普墺戦争後19世紀終わりから20世紀現在におけるビスマルクをめぐる評価は、第二次世界大戦前と大戦後とに区分される。

ドイツでは大戦前はレオポルド・フォン・ランケに代表される「歴史主義」（＝歴史は国家・外交・政治家等個々の行動に基づき生み出されていく、という考え方）のもと、まず第一にドイツ統一の「国民的英雄」という評価があった。これには「鉄血宰相」「ユンカー的立場にたって統一を行った」という評価が含まれる。

二つ目には「ボナパルティスト」としての評価がある。「ボナパルティスト」とはボナパルティズム＝ナポレオン主義あるいはシーザー主義を持った人物の意で、その内容として、ナポレオン1世あるいは3世の政策と、他の国での似た状況にある政策を指し、選挙や社会政策等一見民主的な政策で専制政治を正当化させるものである。ビスマルクの場合、前述の連邦改革案にあった、普通選挙で議会を開設するという、ナショナリズムを含む世論に訴えかけ、結局プロイセン国王を頂点とする支配体制を築いた、という点で、大戦前には彼にもボナパルティズムを持っていたのでは、という評価をした。あるいは完璧なボナパルティズムではないがビスマルクにも似たとこ

ろがあるので「プソイド（擬似）・ボナパルティズム」との評価もある。マルクスも同様な評価をして、「ビスマルクは（マルクスの考える）革命を行う力の対局にある反動的な強さを持っている」と述べている。私は、確かにビスマルクは前述の連邦改革案等「ボナパルティスト」的面があるが、ナポレオンが皇帝となったのとは違い、プロイセンの首相、政治家である。ゆえに彼の上には常にプロイセンの王権があるので、完璧には「ボナパルティスト」には当てはまらない、と思う。あえて言うならば「プソイド（擬似）・ボナパルティズム」といったものであろう。

大戦後、歴史主義に対して批判がでてくる。英雄ではなく政治家としてのビスマルクの能力を評価することが主流化する。例えばフリードリッヒ・マイネッケは「ビスマルクの登場によってドイツにおける事態の成り行きは、その歴史的発展において本来そう定められていなかった方向に、不幸な展開をとげたのではなかろうか」と批判的である。またオットー・プフランツェは、「ビスマルクは政治に対してあらゆる可能性を考え、常に複数の選択肢を準備して、交渉などで減らしていき自分の考えに近づけていった」という“オールタナティブのストラテジー”（＝選択肢の戦略）を主張する。ビスマルクの政策がある面で紆余曲折しているように見えるのも様々な選択肢を用意しているから、というのがプフランツェの考え方である。例えばシュレスヴィヒ＝ホルシュタイン問題での彼の選択肢は（a）両公国のプロイセンへの併合（b）デンマークへの実質的併合（c）両公国の独立と連邦への加入、の3つであり最も望んでいたのは（a）の選択肢で逆に望ましくないのは（c）の選択肢である。（b）（c）を消して（a）に持っていったのだ、と説明する。一方ロタール・ガルはプフランツェがビスマルクを過大評価していると批判、“最大（マクシマル）・最小（ミニマル）プログラム”を主張した。確かにビスマルクの政治家としての能力は認めるが、選択肢などは用意せず、決定的な瞬間には状況に身を任せ、例えばドイツ統一にしてもできればオーストリア抜きでドイツ全土、あるいは少なくともライン川以北の北ドイツ圏における覇権を目指した、と説明する。ガルは前者を最大（マクシマル）プログラム、後者を最小（ミニマル）プログラムとよんでいる。

## 8. おわりに

ビスマルク評価については、前述のプフランツェ、ガルが認めるところであるが「現実政治（リアル・ポリティック）」の政治家であり、従来の保守的・反動的（ユンカー的）政治家という評価は停滞気味である。今後、「下からの歴史（社会史）」の視点による歴史的評価も進むものと思われる。また高校世界史の教科書を見ると、その本文にはビスマルクの行った統一事業、特に軍備拡張（鉄血政策）と2つの戦争に重点が置かれる場合が多い。そのため彼に「統一の英雄」とか「強権的政治家」といった印象を持ってしまう方向にあるのではないか。一方でドイツの統一は、ドイツ関税同盟がドイツの大部分に広がった段階で方向がほぼ固まり、2つの戦争は統一のせきを切る役割を果たした、という評価も教科書の中でされている場合もある。人物欄・コラムで現実主義の政治家という評価を下す記述もある。私は、教科書会社間の相違があって、さらに世界史AとBとではこの問題の視点が変わってくる、などある

が結局のところ教える側の教師がビスマルクの評価をどうおさえるかにかかっていると考える。英雄的な一面をあげることは間違いではないが一官僚・一個人の有能な政治家であったという評価をしてもらえれば良いと考えている。

[質疑応答]

(意見として) 先生のテーマはビスマルクの政治思想としているのに今回の発表ではビスマルクが生きた時代の政治史の羅列に過ぎない。後半のビスマルクをめぐる評価を中心にやってほしかった。(天塩高 飯田)

A: 確かにその通りであった。1時間という制約の中、できれば歴史学の論争という部分で描ければ良かったのだが。

Q: ビスマルクはボナパルティストではない、と言われるが真のボナパルティストとは何かを説明してほしい。(天塩高 飯田)

A: 私はビスマルクがプソイド・ボナパルティストであり、そもそもボナパルティズムはフランスにしか当てはまらないのでは、と考えている。ボナパルティストの範疇にエカチェリーナ、マリア・テレジアを含んでいる学者もいるが、そこまで行くと専門外でわからない。

(意見として) 私はボナパルティストにはもっと大きい意味があると思う。1つの定義では終わり得ないのでは。(天塩高 飯田)

(意見として) 別の理解としてボナパルティストとは新興のブルジョワジーと旧来の農民層との対立を利用しながら軍事力を背景として支配していくナポレオン1世・3世らを指すのでは。ビスマルクの場合だとユンカー層との関係が出てこないと説明できないのでは。(札幌園高 佐々木)

A: 外交史中心になってしまった反省点がある。確かにユンカー層・ブルジョワ層自由主義・社会主義者ら議会の勢力に対しビスマルクがどのような対応をしていたか1つのテーマになりうる。ただ、自分としてはビスマルクの政治思想をテーマとしたので各層へのビスマルクの諸政策については今後の研究課題としたい。

Q: 1862~72年の鉄血宰相時代のビスマルク、また一方で1871年以降戦争をしなかったビスマルク、以後戦争を20年間回避したビスマルクがいるがそれぞれのかれの外交方針についてはどのようなものであったのか。

(札幌新川高 宮浦)

A: ビスマルク外交については、1871年以降の部分の研究していないのでよくわからない。ただビスマルク外交を図式化するとフランスを孤立化させることが主たる目的と思われる。このビスマルク各時期の対比については新しい見方であるので私自身もテーマとしていきたい。

(意見として): フランスの孤立化については普仏戦争以後であり、フランスとの戦争を重要視しないという先生の触れなかった部分であるので、矛盾するのではないか。(南富良野高 古谷)

A: フランスとの戦争を重要視しないというのは、ドイツ統一をめぐる視点においては、オーストリアとの戦争が重大であった、という意味である。統一期のビス



マルクがどのような考え方をもっていたか、どうしてもオーストリアとの戦争が重大に扱われる。と、フランスとの戦争がどうしてもよい訳ではない。北ドイツ連邦の成立でドイツ統一が位置付けられた、ということで普仏戦争を取り上げなかった。

Q：先生はビスマルクをどのように評価しているか。 (南富良野高 古谷)

A：プフランツェの学説に対しては過大評価であると思う。ガルの学説に近い考え方である。盲目的に評価(単なる英雄としての評価)よりは現実政策の政治家としての評価を強調したかった。

新刊紹介

F. ドルーシュ総合編集『ヨーロッパの歴史 欧州共通教科書』, 木村尚三郎監修, 花上克己訳, 東京書籍, 1994年。

本書は、「EC統合からEUへ」という歴史の流れの中で、「欧州共通教科書」(本書の副題)として、加盟12か国の学者・教師が共同執筆したものの邦訳である。それぞれが各々「自国語」で1章ずつ執筆し、残りの11人が修正・討議を重ね、4年の歳月をかけて完成した。本書の企画・編集・執筆過程で現れた様々な問題は、94

世界が注目! 初の全ヨーロッパ史ついに完成!

欧州共通教科書

# ヨーロッパの歴史

F・ドルーシュ総合編集/木村尚三郎監修/花上克己訳

EU新時代に向けてヨーロッパは過去をどのように  
とらえ、未来をどう構築するのか?  
12か国の歴史家共同執筆による待望の書。



東京書籍 北海道支社:札幌市中央区南6条西14-1-5 東書ビル 〒064 TEL.011-562-5721 FAX.011-562-5492



年春に朝日新聞紙上で、連載記事「おお、ヨーロッパ」としてまとめられたので、周知の方も多いであろう。EU加盟12か国が、経済・通貨を統合し、さらに外交での共同歩調を模索し、「歴史認識」をも共有しようとする意識の現れである。筆者はまずこの試みに敬意を表すると共に、「例えばアジアでこうした教科書は書けるか」

「書くとなれば、何を乗り越えなければならないか」ということを常に考えさせられながら読んだ本であった。

本書は、全体で序章と11章からなる。序章「ヨーロッパとは何か」では、国民国家を乗り越え、新たな「地域主義」の立場から統合を模索するヨーロッパの「アイデンティティ」を、地理・民族・文化・宗教・言語など様々な観点から探ろうとしている。例えば、記述の中で「ビザンツ世界はヨーロッパか?」といった発問がなされる。朝日の記事によれば、トルコはヨーロッパか?ということについての認識のズレが、現在のトルコ系移民問題の根底にあるという。このように、現実の問題を「歴史的に」分析する視点を持たせる試みが随所に見られる。

同時に、筆者は本書を通読して、「国民国家を乗り越える歴史認識」の難しさを感じた。「ナポレオンをどうみるか」「両大戦はヨーロッパの『内戦』だった」など、日本の世界史教科書記述から見ると疑問を感じる場所は少なくない。日本についての言及は「広島・長崎」のみ、アジア・アフリカについても、支配される側の視点はない。奴隷制について「…不幸な現実も生み出したが、世界の民族との出会いはヒューマニズムの確立を促した…」(191p)という表現がそれを物語る。当初の意気込みにもかかわらず、教科書として採用されたのは「西欧ではゼロ」(朝日)である。イギリスでは、TVで猛反発を受け、書評の8割が「フランス寄り」と批判した。

それにもかかわらず、やはり本書は、その図版・章末の11枚の地図(「旅への誘い」と題し、実際に史跡を訪ねる上でのガイドとなっている)ともあいまって、魅力的な「教科書」といえる。事実を羅列し、知識を詰め込むという日本の教科書の視点ではなく、「国民国家を乗り越え」ようとし、「自国史賛美」ではない「文化的多元主義(p191)」を指向する視点を持った教科書だからである。

なお、誤記・誤植と思われるものが散見された。また、図版説明についての統一が見られない(邦語文献の提示があるものとなないものがある)。こうした点は、授業で活用する際に不便である。改良を望む。(なお、「おおヨーロッパ」については、連絡をいただければ、コピーをさしあげます)

(札幌西高校 吉嶺 茂樹)

宮崎正勝『イスラム・ネットワーク—アッバース朝が繋げた世界』

講談社選書メチエ、1994年。

本書は、ネットワーク論によって世界史を再構成しようとする、意欲的な試みの成

果である。「あとがき」によれば、本書執筆の意図は、「『ネットワーク論』を用いて同時代のアフロユーラシアの結びつき方を説明し、『世界史の起点』がイスラム・ネットワークにあることを明らかにするところ」にあるとされる。

本書の冒頭では、都市の成立を「ネットワーク革命」としてとらえ、そのネットワークのシステム化の結果として国家の形成がなされ、さらにネットワーク網の拡大の結果「世界帝国」が出現するという大枠が示される。その「世界帝国」相互のネットワークが結びつきを強めた結果として、「ネットワーク帝国」が形成されるが、その最初の例としてアッパース朝が描き出される。そして、ヨーロッパ・アフリカの西方社会へのネットワークの発展に続いて、内陸アジアのイスラム・ネットワークが説明され、ヴァイキングの活動がアッパース朝のネットワークの北辺に位置づけられる。さらに、ペルシア湾から中国へ至る東方世界へのネットワークが述べられ、次のモンゴル・ネットワークへの展望を示して結ばれている。これまでの概説書になかったスケールの大きさをには、圧倒される思いがするが、それと同時に、既存の研究を著者独自の視点で再構成することによって、アッパース朝史研究に新しい光をあてた著者の発想の柔軟さには、感嘆のほかはない。

ネットワーク論を全面に出した教科書も出現しており、今後の授業を考えるうえでも、必読の文献といえよう。

また、本書の特徴は、著者がかつて高等学校の教壇に立っていたことにあり、著者の授業のなかでの語り口を感じられる部分がある。特に第七章「ヴァイキングの活動」は、史料・地図・図版を駆使して、スウェーデン系ヴァイキングの活動が描き出されているが、この章などは一種の授業書として読むことも可能であろう。

なお、昨平成6年8月8日、本会の会員有志ほかによって、「宮崎正勝先生を囲む会」が札幌西高等学校で開かれ、ネットワーク論についての理解を深めたことを付記しておきたい。

(札幌西高校 中村和之)

第26回研究会案内

日時 平成7年8月9日(火)  
会場 札幌市教育文化会館  
講演 未定  
研究発表 未定(募集中)

世界史研究会の会報も、第2号の発行にこぎ着けることができましたが、これも会員の皆さまのご協力の賜物と感謝しております。今後とも率直なご意見をお寄せ下さいますよう、お願いいたします。

(札幌西高 中村)